

2025年度入学者選抜（A日程・1月25日）【60分】

国語試験問題

「現代の国語」、「言語文化」（小説・漢文を除く）

学芸学部…日本語日本文学科

一

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい（ただし、設問の都合上変更した箇所がある）。

人間が電気を使って音楽を聴くようになって百年以上たつ。この間に「音楽を聴く」という行為は、とりわけ身体次元において、エディソン以前^①電気音楽以前とは似ても似つかないものとなった。生の音楽と録音された音楽は、本当は「X」と映画くらい違うものなのだ。それでも二〇世紀においてはまだ、たとえば電気を使って音楽を記録するとか、音量をゾウフクするとか、音色を変化させるといったことは、「本来の」音楽をよりよく伝達するためのツール以上ではない——

A 「音楽」はかつてのまま人間が生身の身体で奏^{かな}でる音楽であり続けていて、単にそれをもっと効率よく伝える補助・補正手段として電気はあるにすぎない——という幻想を、人は抱くことができた。しかし二一世紀の今日、電気が根底的に人間の音楽身体を作りかえてしまったことが、誰の目にも明らかになってきた。たぶん今の多くの若い人たちにとって「音楽をする」とは、モニター操作やパソコンゲームに近い感覚なのだろう。

*

今日の人々が聴いている音楽のほぼすべては、電気を通した音楽だと言っていいだろう。そもそも大多数の人々にとって「音楽を聴く時間」の九割以上が録音された音楽、つまりラジオやCDやネット動画であって、ライブに行く時間はそれに比べると微々たるもののはずだ（音楽を聴くことを本職にしている私でもそうだ）。電気を通さないポピュラー音楽などありえないし、クラシックのようなアコースティック音楽の最後の牙城ですら、大ホールで演奏する場合は、目立たないようにPA（音響機器）を入れていることがある。オペラをスタジオ録音する際に、おそらく声とオーケストラのバランスを調整するためだろう、ポピュラー音楽と同様にシキ者も歌手も皆、ヘッドフォンをつけて棒を振ったり歌ったりしている映像を見たこともある。ビッグバンドの録音の際、借りたスタジオが手狭なときには、セクションごとに別々のスタジオに演奏者を配置して、同時演奏／録音するという話も聞いたことがある。^{*1} スカイプを使って東京とニューヨークでセッションして遊ぶということも行われているようだ。

諸芸術の中で音楽と【Y】は、電気がなくなったら営みの大半が不可能になってしまうジャンルである。【Z】や絵画や彫刻や演劇ではこんなことは起こらないだろう。ロウソクのあかりで詩を読むのは苦勞するだろうが、それはそれで風情もあるう。しかし音楽の場合、自分が楽器ができるか（あるいは歌えるか）、B 身近に楽器ができる人がいない限り、私たちは音楽を聴けなくなってしまう。これまでスイッチ一つでヘッドフォンなどで便利に聴けていた音楽の楽しみが、あつという間に消滅してしまう。

それだけではない。（中略）私たちが当たり前のようにCDで楽しんでいるフルトヴェングラーやビートルズや美空ひばりの音楽は、実はみんな電気システムの中に封じ込められた過去の幽霊が奏でているものなのだ。ほとんど「音楽、それは電気が作り出す幻影だ」とすら言いたくなるほどである。

録音技術が生まれる以前の人々にとって音楽とは、^a「今ここ、私のそばに、誰かがいる」という絶対的な証であった。当然ながらアコースティック環境にあったは、音を鳴らす誰かが「今ここ」にいない限り、音は鳴らないのだから。「音楽が聞こえる」とは、「（I）」ということと同義だったのである。逆にいえば、当時フォノグラフと呼ばれていた初期蓄音機が登場したと尾とき、^{*2} 多くの人々に強い違和感とショックを与えたのは、「音を鳴らす人の不在」だった。トーマス・マンの『魔の山』^{*3} 中の「楽音の泉」という章は、こうした初期レコード文化史という点でとても興味深い。

「櫃ひつの内部から人間の声が、男声がふつくと、力づく、オーケストラの伴奏で流れた。イタリアの有名なバリトン歌手の声であった「中略」器械を見ずに耳を傾けていると、サロンに声楽家自身が楽譜を持って現実に立ってうたっていると思えなかった。声楽家はイタリア語でオペラのむずかしい詠唱アリアをうたった、——ああ、床屋。親方、親方！そこ行くフィガロ、あそこ行くフィガロ、フィガロ、フィガロ、フィガロ。——聞いている客たちは「中略」腹をかかえて笑った。「中略」聴衆はそのうたいぶりに興奮させられて、うたいおわるのを待たずにブラヴォーを連呼した」（岩波文庫『魔の山（下）』より。以下同）。

以上からおわかりのように、初めてレコードを聴いた客は拍手をしている、つまり（たとえば手品などでもいかにもありそんなことだが）まるで蓄音機の箱（マンは「櫃」と形容している）の中に人が隠れて歌っているかのような反応を、客はしているのである。歌声が聞こえてくるからには「今そこ」に誰かいるんだろう／いないはずがない——そんな反応だ。

しかしやがて蓄音機に慣れてくると、最初とは少し違った当惑cが生まれてくる。蓄音機の前で「何時間も過ぎ、両びらきの扉を左右にひらいた櫃のまえの安楽椅子に坐って、両手を組みあわせ、首をかしげ、口をひらき、流れでる楽音の奔流につつまれて」いる主人公は、次のようなことを考える。「彼をまえにしようたつてくれた男女の歌手たちは、姿を見せず、本人はアメリカ、ミラノ、ウィーン、ペテルスブルグにいたのだったが——本人はどこにしようとかまわなかった」云々。ピタゴラスは自らの神秘性を高めるためにカーテンで姿を隠して講義をしたと言われ、こうした音源が見えない状態で音が聞こえてくることを「アクースマティック」と言うが、まさに『魔の山』の主人公を当惑させたのは、不在のはずの歌手の声だけが今ここで聞こえてくる経験であった。

ちなみにブルーストの『失われた時を求めて』の中にも、大好きだった祖母から電話がかかってきて、C あれだけ愛していた祖母の声があるときひどく奇妙なものに聞こえ、ショックを受ける主人公のエピソードが出てくる。音がするのに音を発生させているはずの（Ⅱ）がそこにある——今日の私たちはこの状況について何の疑問も覚えず、当たり前のことだと思っているが、録音メディアが出現した当初の状況を生々しく想起しておくのは、とても大事なことだと思う。ひょっとすると音楽が持つていた根源的な何かが、その瞬間を境にして一変してしまったのかもしれないのだから。

今そこにいない人——もはや死者であるかもしれない——が、今そこで歌っている。よく考えればこれは異様なことである。

D 冬の深い森の夜道で迷ってしまったとき、そこに誰かが歌いながら近づいてくるのが聞こえたとしたら、それはどれほど人を安堵させることか。音楽というものはひよっとすると、「私は地上でたった一人かもしれない」という実存の不安を根源から打ち消す力をもった何かだったかもしれないのだ。「あなたは地上で一人ではない」と言ってくれる何か。しかしながら歌声がする方向に歩いて行つて、そこで見つけたのがスイッチが入ったまま鳴り続けているCDプレーヤーだったとしたら、人は絶望のどん底に叩き落とされるのではあるまいか。電気が作り出す幻覚は恐ろしい。

(中略) 三輪眞弘は、電気メディアと音楽のかかわりを、最も根本的なところから考え直す作品を世に問い続けてきたゼンエィ作曲家であるが、彼は「録音された音楽」と「生の音楽」とは根本的に別のものであり、前者は「音楽」ではないということを明確にするべく、「録楽」という概念をティショウしている(中略)。三輪によれば「音楽」とは本来、今そこに人間がいて、今その場で聴かれるもの以外ではあるはずがないのであり、複製技術によって不在の人間が奏でる何かは、「録楽」ではあつても「音楽」ではないというのである。

三輪は再三録楽を「亡霊」にたとえているが、これは卓見だ。確かに録音で聴く音楽にはどこか幽霊じみたものがある。マンの『魔の山』の主人公は、蓄音機でヴェルディのオペラ《アイーダ》の最後の場面——主人公の男女が死罪宣告を受け、地下牢に生き埋めにされるところで歌われる愛の二重唱——を聴きながら、次のような凄惨な光景を想像する。「二人は、土牢のガスに肺をみたされ、二人が一しよに「中略」痙攣しながら餓死をとげ、二人の体は腐敗して二目と見られない姿にかわり、土牢のなかには骸骨が二つ横たわるだけになり「後略」」。

ここでマンは《アイーダ》の恋人たちと、その役を歌っているひよっとするともうこの世にいないかもしれない歌手の肉体とを、空想の中で重ね合わせている。肉体は地下でもはや朽ち果ててしまい、彼らの「声」だけが電気によって生きたまま保存され、この世をさまよっている——マンが思い描いているのはおそらくこんなイメージである。ちなみに彼が蓄音機を再三「櫃」にたとえていることにも注意をうながしておこう。いわく「魔法の櫃の魔術、——ヴァイオリン用材でつくられた低く小さな棺ふうの箱、くすんだ黒色の櫃の妙音」。マンは蓄音機が幽霊、すなわちそこにいない者の声と呼び出す魔術であることを、直感的に察していたようである。

ただしマンが『魔の山』で描いた二〇世紀初頭の初期蓄音機の時代にあつては、録音された音には必ず特定の人間のリアルな身体が対応していた。これを忘れてはなるまい。たとえば今は別の都市に演奏旅行におもむいているにしろ、あるいはもはやこの世にはいないとしても、ともかくその音楽を奏でた者の身体は録音時には実在していた。

言うまでもなく音とは空気シンドウであり、必ずそれを発生させた身体がある。少なくともかつてあつたはずである。だからこそ人は、たとえばサラサーテのような伝説のヴァイオリニストのSPレコードを聴くとき、まるでそれを聖者の遺骸を崇めるかのようにして聴く。マリア・カラスでもルイ・アームストロングでもフルトヴェングラーでもいい。「ああ、もはや彼女／彼はこの世にいない、しかし確にかつてこの音楽を奏でた身体が、地上に存在していたのだ」——そういう驚嘆をもって録音に耳を傾けるのだ。

しかしながら二〇世紀の半ばを過ぎたあたりから、「いまだかつてどこにも存在したことのない身体が奏でる音楽」を、電気によつて自在に作り出すことができるようになり始める。いまどきの若い人ならヴォーカロイドを連想するだろう。

（岡田暁生『音楽と出会う——21世紀的つきあい方』による）

*1 スカイプ……音声・ビデオ通話を行うアプリケーション。

*2 蓄音機……十九世紀半ばから普及した、音声の再生装置。箱型の台座のうえに、ラップ状のホーンが付いている形状が一般的で、音声が録音された、円盤状のレコードを再生する。アメリカの発明家・エジソン（エディソン）が開発・普及に携わった。

*3 『魔の山』……一九二四年に出版された、トーマス・マン（独）の小説。二十世紀初頭のドイツが舞台。

*4 櫃……大きい箱。キリスト教の「聖櫃」には、宗教上の特別な用具や、聖人の遺体が収納された。

問一 二重傍線部①⑧の漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 波線部「これは卓見だ」について、「卓」と同じ漢字を含むものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 業務をイタクする。

イ 原野をカイタクする。

ウ 議案をサイタクする。

エ タクハイ便を依頼する。

オ タクエツした業績。

問三 空欄部

A

D

 に入る最も適切な語をつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度

以上使用しないこと）。

ア しかし イ もちろん ウ または エ つまり オ たえば

問四 空欄部「X」

Y

「Z」に入る最も適切な語をつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は

二度以上使用しないこと）。

ア 小説 イ 演劇 ウ 建築 エ 映画

問五 傍線部a「今ここ、私のそばに、誰かがいる」という絶対的な証」について、このようにいえる理由として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 録音技術が生まれる以前は、誰も人がいないのに音楽が聞こえるようになることなど、絶対に信じようとしなかったから。

イ 録音技術が生まれる以前は、誰かがそばで音を鳴らさない限り、周囲で音楽が聞こえることはありえなかったから。

ウ 録音技術が生まれる以前は、誰にとっても音楽とは、直接ライブやホールを訪れ演奏者のそばで聞くものだったから。

エ 録音技術が生まれる以前は、誰もそばにいないのに聞こえてくる音楽は、過去の幽霊の演奏だと考えられていたから。

問六 空欄部（Ⅰ）に入る最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア そこで私が音を聞いていた

イ どこかの誰かが私に音を鳴らす

ウ どこか遠くで誰かが音を鳴らす

エ 音を鳴らす誰かがそこにいる

問七 傍線部ｂ「初めてレコードを聴いた客」について、初めて録音された音楽を聴いた『魔の山』の登場人物達の様子として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 最初は当惑したが、やがて箱の中に誰もいないことを理解した。

イ 聴衆達も、箱から聞こえる音楽に、声を合わせて合唱した。

ウ 音楽家がそこにいるかのように、惜しみなない称賛を送った。

エ 箱に隠れてむずかしいオペラを歌っていると思つて、興奮した。

問八 傍線部ｃ「最初とは少し違った当惑」について、録音技術に慣れてきた『魔の山』の登場人物は、どのような点に当惑しているか。本文中から二十字以上二十五字以内で抜き出し、最初の八字を答えなさい（ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること）。

問九 空欄部（Ⅱ）に入る最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 精神

イ 霊魂

ウ 器械

エ 行動

オ 身体

問十 傍線部 d 「音楽が持っていた根源的な何か」について、筆者は「音楽が持っていた根源的な何か」をどのようなものだと考えているか。それを示す一文を本文中から抜き出し、最初の八字を答えなさい。

問十一 傍線部 e 「確かに録音で聴く音楽にはどこか幽霊じみたものがある」について、筆者がこのように考える理由として適切ではないものをつぎの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 録音の発明が人間の音楽身体を作りかえ、いまだかつてどこにも存在したことの無い身体でも、音を奏でられるようになったから。

イ 録音技術によって、たとえ演奏者の肉体はなくなっても、その声や演奏を保存することができるから。

ウ 録音メディアの出現当時を描いた『魔の山』も、蓄音機の箱を「魔法の櫃」「棺ふうの箱」等と表現しているから。

エ 録音から聞こえる音楽を奏でた演奏者は、もはやこの世に存在しない、死者であるかもしれないから。

問十二 傍線部 f 「録音された音には必ず特定の人間のリアルな身体が対応していた」とあるが、どういうことか。最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 録音された音に対しても、人々の身体は、生の演奏を聞くと同じ興奮や安堵を覚えたということ。

イ 録音された音に対しても、人々は、現実の演奏者が今そこにいるかのような反応をみせたということ。

ウ たとえ録音された音であっても、その人の身体が発した音を、忠実に複製していたということ。

エ たとえ録音された音であっても、その音を発生させた生身の身体が、必ず存在したということ。

問十三 傍線部g「聖者の遺骸を崇めるかのようにして聴く」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

アすでに過去の人となった、伝説的な演奏者が遺した録音を、そこに電氣が利用されていることを知りつつも、まるで本物の演奏かのようにリアルに感じるということ。

イすでに存在しない、素晴らしい演奏者が遺した録音を、それが彼らの生身の演奏ではないことを知りつつも、まるで演奏者の身体が奏でているかのように尊ぶということ。

ウすでに死んでしまった、偉大な演奏者が遺した録音を、彼らが亡くなっていることを知りつつも、まるで死者が今ここに生き返ったかのように、生々しくうけとめるということ。

エすでに肉体は消滅した、有名な演奏者が遺した録音を、それが彼らの亡霊のようなものであることを知りつつも、まるで本物の声であるかのように神聖視するということ。

問十四 本文の内容の説明として適切なものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア電氣登場以前の音楽が持っていた根源的な何かは、二〇世紀半ばに、いまだどこにも存在したことのない身体が奏でる音楽が出現し、一変してしまった。

イ録音メディアが登場した当初の様子を描いた『魔の山』は、電氣の出現で音楽の聞き方が変わったことを、人物達の反応を通して批判的に描いている。

ウかつては録音された音にも、必ず人間のリアルな身体が対応していたが、今日ではどこにも存在したことのない身体が奏でる音楽を、自在に作りだすことができる。

エ録音技術以前、音楽は「今ここ、私のそばに、誰かがいる」ことの絶対的な証だったが、今日の私たちは、音を鳴らす人の不在を当然だと思っている。

オ生の音楽と電氣を通した音楽は根本的に別のもののはずだが、現在の人々にとって、電氣を通さない音楽を聞くことはもはや不可能になってしまった。

問十五 電気で音楽が聴かれるようになった約百年前は、日本では大正期、昭和初頭にあたる。この時期に活躍した小説家・梶井基次郎は、自身も西洋音楽を愛好し、音楽に関連した作品やエッセイを多くのこしている。梶井基次郎の作品をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 城の崎にて イ セロ弾きのゴーシュ ウ 斜陽 エ 風立ちぬ オ 檸檬

二 つぎの文章は、『宇治拾遺物語』の一節である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、遣唐使の、唐にある間に妻をまうけて子を生まれせ¹ 1 つ。その子いまだいとけなきほどに、日本に帰る。妻に契りて曰く、「異遣唐使行かむにつけて、消息やるべし。またこの子乳母離れんほどには迎へ取るべし」と契りて帰朝しぬ。母、遣唐使の来るごとに、「消息やある」と（① 尋ぬ）ど、あへて I 音 もなし。母おほきに恨みて、この稚児を抱きて日本へ向きて、稚児の首に「遣唐使それがしが子」といふ札を書きて結びつけて、「宿世あらば、親子の中は行きあひなん」といひて、海に投げ入れて帰りぬ。

父、ある時難波の浦の辺を行くに、沖の方に鳥の浮びたるやうにて、（② 白し）物見ゆ。近くなるまに見れば、童に見なしつ。あやしければ馬をひかへてみれば、いと近く寄りくるに、四つばかりなる稚児の白くをかしげなる、波につきて寄り来たり。馬をうち寄せてみれば、大きな魚の背中に乗れり。従者をもちて抱き取ら² 2 せ。て見ければ、首に札あり。「X」と書けり。「さは我が子にこそあり（③ けり）。唐にて言ひ契りし稚児を問はずとて、母が腹立ちて海に投げ入れてけるが、しかるべき縁ありて、かく魚に乗りて II 来たるなめり」とあはれにおぼえて、いみじうかなしくて養ふ。遣唐使の行きけるにつけて、この由を書きやりたりければ、母も今はかなきものに思ひけるに、かくと聞きてなむ、希有のこと

なりとよろこびける。Ⅱ

さてこの子、大人になるままに手をめでたく書きけり。魚に助け《 3 られ》たりければ、名をば魚養とぞつけたりける。
七大寺の額どもは、これを書きたるなりけりと。

問一 波線部 a 「曰く」 b 「乳母」(「うば」とは読まないこと) c 「宿世」の漢字の読みを、ひらがな(現代仮名遣い)で答えなさい。

問二 《 1 つ》《 2 セ》《 3 られ》の意味を、つぎの中からそれぞれ選び記号で答えなさい(ただし、同じ記号は二度以上使用しないこと)。

ア 受身 イ 完了 ウ 推量 エ 断定 オ 使役

問三 (① 尋ぬ) (② 白し) (③ けり) のそれぞれを、適切な形に活用させて答えなさい。

問四 傍線部1「いとけなきほどに」 2「契りて」の訳として最も適切なものを、つぎの中からそれぞれ選び記号で答えなさい。

1「いとけなきほどに」

ア 幼い時分に イ 細い体つきの時に ウ 愛らしい頃に エ 胎児の折に

2「契りて」

ア 結婚をして イ 約束して ウ お願いして エ 縁を求めて

問五 I 音 同じ意味で用いられている語を文中から抜き出して答えなさい。

問六 II 来たるなめり をつぎの例のように／線で品詞分解して解答欄に答えなさい。

例Ⅱ 今／は／昔

問七 「X」に入る適切な語句を、本文中からそのまま抜き出して答えなさい。

問八 傍線部A「かなしくて養ふ」 B「母も今ははかなきものに思ひけるに」の現代語訳として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A「かなしくて養ふ」

ア さびしいので教え込んだ

イ かわいがって育てた

ウ かわいそうに思って食事をあたえた

エ 愛情をもって勉学に導いた

B「母も今ははかなきものに思ひけるに」

ア 母はすでに亡くなってしまっただろうと、遣唐使が思っていたところ

イ 母も、もう子は今は亡くなってしまっただろうと、思っていたところ

ウ 母も、もうすでに遣唐使とのことはかりそめの夢だったのだと、思っていたところ

エ 母も子も、今となっては遣唐使はすでに亡くなっていたと思っていたところ

問九 二重傍線部Ⅰ「この由を書きやりたりければ」Ⅱ「よろこびける」の主語を、つぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 異遣唐使 イ 母 ウ 稚児 エ 父 オ 従者

問十 太傍線部「七大寺の額どもは、これが書きたるなりけりと」と言える根拠に該当する一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問十一 本文の内容と合致するものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア ある遣唐使が妻子を唐において日本に帰った。

イ 他の遣唐使が唐に行くことはまったくなかった。

ウ ある遣唐使の子が唐から泳いで日本にやって来た。

エ 父は難波の浦で亀に乗っている子を見つけた。

オ 妻は遣唐使からの手紙を受け取らずに亡くなった。

カ 魚養という名は日本で付けられた子の名である。

問十二 本文の『宇治拾遺物語』はどれに分類されるか、つぎの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 物語文学 イ 説話文学 ウ 日記文学 エ 紀行文学

2025年度入学者選抜（A日程・1月25日）【60分】

国語試験問題

「現代の国語」

学芸学部…英語文化コミュニケーション学科・子ども教育学科・
メディア情報学科・生活デザイン学科
人間社会学部…社会マネジメント学科・人間心理学科
栄養科学部…健康栄養学科・管理栄養学科
短期大学部…食物栄養学科

一

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい（ただし、設問の都合上変更した箇所がある）。

人間が電気を使って音楽を聴くようになって百年以上たつ。この間に「音楽を聴く」という行為は、とりわけ身体次元において、エディソン以前に電気音楽以前とは似ても似つかないものとなった。生の音楽と録音された音楽は、本当は「X」と映画くらい違うものなのだ。それでも二〇世紀においてはまだ、たとえば電気を使って音楽を記録するとか、音量をゾウフクするとか、音色を変化させるといったことは、「本来の」音楽をよりよく伝達するためのツール以上ではない——

A 「音楽」はかつてのまま人間が生身の身体で奏でる音楽であり続けていて、単にそれをもっと効率よく伝える補助・補正手段として電気はあるにすぎない——という幻想を、人は抱くことができた。しかし二一世紀の今日、電気が根底的に人間の音楽身体を作りかえてしまったことが、誰の目にも明らかにようになってきた。たぶん今の多くの若い人たちにとって「音楽をする」とは、モニター操作やパソコンゲームに近い感覚なのだろう。

*

今日の人々が聴いている音楽のほぼすべては、電気を通した音楽だと言っているだろう。そもそも大多数の人々にとって「音楽を聴く時間」の九割以上が録音された音楽、つまりラジオやCDやネット動画であって、ライブに行く時間はそれに比べると微々たるもののはずだ（音楽を聴くことを本職にしている私でもそうだ）。電気を通さないポピュラー音楽などありえないし、クラシックのようなアコースティック音楽の最後の牙城ですら、大ホールで演奏する場合は、目立たないようにPA（音響機器）を入れていることがある。オペラをスタジオ録音する際に、おそらく声とオーケストラのバランスを調整するためだろう、ポピュラー音楽と同様にシキ者も歌手も皆、ヘッドフォンをつけて棒を振ったり歌ったりしている映像を見たこともある。ビッグバンドの録音の際、借りたスタジオが手狭なときには、セクションごとに別々のスタジオに演奏者を配置して、同時演奏／録音するという話も聞いたことがある。スカイプを使^{*1}って東京とニューヨークでセッションして遊ぶということも行われているようだ。

諸芸術の中で音楽と【Y】は、電気がなくなったら営みの大半が不可能になってしまうジャンルである。【Z】や絵画や彫刻や演劇ではこんなことは起こらないだろう。ロウソクのあかりで詩を読むのは苦労するだろうが、それはそれで風情もあるう。しかし音楽の場合、自分が楽器ができるか（あるいは歌えるか）、B 身近に楽器ができる人がいない限り、私たちは音楽を聴けなくなってしまう。これまでスイッチ一つでヘッドフォンなどで便利に聴けていた音楽の楽しみが、あつという間に消滅してしまう。

それだけではない。（中略）私たちが当たり前のようにCDで楽しんでいるフルトヴェングラーやビートルズや美空ひばりの音楽は、実はみんな電気システムの中に封じ込められた過去の幽霊が奏でているものなのだ。ほとんど「音楽、それは電気が作り出す幻影だ」とすら言いたくなるほどである。

録音技術が生まれる以前の人々にとって音楽とは、「今^aここ、私のそばに、誰かがいる」という絶対的な証であった。当然ながらアコースティック環境にあつては、音を鳴らす誰かが「今^aここ」にいない限り、音は鳴らないのだから。「音楽が聞こえる」とは、「（I）（I）」ということと同義だったのである。逆にいえば、当時フォノグラフと呼ばれていた初期蓄音機^{*2}が登場したと尾とき、

多くの人々に強い違和感とショックを与えたのは、「音を鳴らす人の不在」だった。トーマス・マンの『魔の山』*³の中の「楽音の泉」という章は、こうした初期レコード文化史という点でとても興味深い。

「櫃ひつの内部ひつから人間の声が、男声おとこごゑがふつくと、力づく、オーケストラの伴奏で流れでた。イタリアの有名なバリトン歌手の声であった「中略」器械を見ずに耳を傾けていると、サロンに音楽家自身が楽譜を持って現実に立ってうたっていると思えなかった。音楽家はイタリア語でオペラのむずかしい詠唱アリヤをうたった、——ああ、床屋。親方、親方！そこ行くフィガロ、あそこ行くフィガロ、フィガロ、フィガロ、フィガロ。——聞いている客たちは「中略」腹をかかえて笑った。「中略」聴衆はそのうたいぶりに興奮させられて、うたいおわるのを待たずにブラヴォーを連呼した」（岩波文庫『魔の山（下）』より。以下同）。

以上からおわかりのように、初めてレコードbを聴いた客は拍手をしている、つまり（たとえば手品などでいかにもありそうなことだが）まるで蓄音機の箱（マンは「櫃」と形容している）の中に人が隠れて歌っているかのような反応を、客はしているのである。歌声が聞こえてくるからには「今そこ」に誰かいるんだろう／いないはずがない——そんな反応だ。

しかしやがて蓄音機に慣れてくると、最初とは少し違った当惑が生まれてくる。蓄音機の前で「何時間も過ごし、両びらきの扉を左右にひらいた櫃のまえの安楽椅子に坐って、両手を組みあわせ、首をかしげ、口をひらき、流れでる楽音の奔流につつまれて」いる主人公は、次のようなことを考える。「彼をまえにしておたててくれた男女の歌手たちは、姿を見せず、本人はアメリカ、ミラノ、ウィーン、ペテルスブルグにいたのだったが——本人はどこにいたのかまわなかった」云々。ピタゴラスは自らの神秘性を高めるためにカーテンで姿を隠して講義をしたと言われ、こうした音源が見えない状態で音が聞こえてくることを「アコースマティック」と言うが、まさに『魔の山』の主人公を当惑させたのは、不在のはずの歌手の声だけが今ここで聞こえてくる経験であった。

ちなみにブルーストの『失われた時を求めて』の中にも、大好きだった祖母から電話がかかってきて、C あれだけ愛していた祖母の声があるときひどく奇妙なものに聞こえ、ショックを受ける主人公のエピソードが出てくる。音がするのに音を発生させているはずの（Ⅱ）がそこにある——今日の私たちはこの状況について何の疑問も覚えず、当たり前のことだと思っているが、録音メディアが出現した当初の状況を生々しく想起しておくのは、とても大事なことだと思う。ひょっとすると音楽が持つて

いた根源的な何かが、その瞬間を境にして一変してしまったのかもしれないのだから。

今そこにいない人——もはや死者であるかもしれない——が、今そこで歌っている。よく考えればこれは異様なことである。

D 冬の深い森の夜道で迷ってしまったとき、そこに誰かが歌いながら近づいてくるのが聞こえたとしたら、それはどれほど人を安堵させることか。音楽というものはひよっとすると、「私は地上でたった一人かもしれない」という実存の不安を根源から打ち消す力をもった何かだったかもしれないのだ。「あなたは地上で一人ではない」と言ってくれる何か。しかしながら歌声がする方向に歩いて行つて、そこで見つけたのがスイッチが入ったまま鳴り続けているCDプレーヤーだったとしたら、人は絶望のどん底に叩き落とされるのではあるまいか。電気が作り出す幻覚は恐ろしい。

(中略) 三輪真弘は、電気メディアと音楽のかかわりを、最も根本的なところから考え直す作品を世に問い続けてきたゼンエィ作曲家であるが、彼は「録音された音楽」と「生の音楽」とは根本的に別のものであり、前者は「音楽」ではないということを明確にするべく、「録楽」という概念をティショウしている(中略)。^⑤三輪によれば「音楽」とは本来、今そこに人間がいて、今その場で聴かれるもの以外ではあるはずがないのであり、複製技術によって不在の人間が奏でる何かは、「録楽」ではあっても「音楽」ではないというのである。

三輪は再三録楽を「亡霊」にたとえているが、これは卓見だ。^④確かに録音で聴く音楽にはどこか幽霊じみたものがある。マンの『魔の山』の主人公は、蓄音機でヴェルディのオペラ《アイーダ》の最後の場面——主人公の男女が死罪宣告を受け、地下牢に生き埋めにされるところで歌われる愛の二重唱——を聴きながら、次のような凄惨な光景を想像する。^⑥「二人は、土牢のガスに肺をみたされ、二人が一しよに「中略」瘵^{けいれん}しながら餓死をとげ、二人の体は腐敗して二目^{ふため}と見られない姿にかわり、土牢のなかには骸骨が二つ横たわるだけになり「後略」」。

ここでマンは《アイーダ》の恋人たちと、その役を歌っているひよっとするともうこの世にいないかもしれない歌手の肉体とを、空想の中で重ね合わせている。肉体は地下でもはや朽ち果ててしまい、彼らの「声」だけが電気によって生きたときそのまま保存され、この世をさまよっている——マンが思い描いているのはおそらくこんなイメージである。ちなみに彼が蓄音機を再三「櫃」にたとえていることにも注意をうながしておこう。いわく「魔法の櫃の魔術、——ヴァイオリン用材でつくられた低く小さな棺^かふう

の箱、くすんだ黒色の櫃の妙音」。マンは蓄音機が幽霊、すなわちそこにいない者の声を呼び出す魔術であることを、直感的に察していたようである。

ただしマンが『魔の山』で描いた二〇世紀初頭の初期蓄音機の時代にあつては、録音された音には必ず特定の人間のリアルな身体が対応していた。これを忘れてはなるまい。たとえ今は別の都市に演奏旅行におもむいているにしろ、あるいはもはやこの世にはいないとしても、ともかくその音楽を奏でた者の身体は録音時には実在していた。

言うまでもなく音とは空気^⑧シンドウであり、必ずそれを発生させた身体がある。少なくともかつてあつたはずである。だからこそ人は、たとえばサラサーテのような伝説のヴァイオリニストのSPレコードを聴くとき、まるでそれを聖者の遺骸^gを崇めるかのようにして聴く。マリア・カラスでもルイ・アームストロングでもフルトヴェングラーでもいい。「ああ、もはや彼女／彼はこの世にいない、しかし確にかつてこの音楽を奏でた身体が、地上に存在していたのだ」——そういう驚嘆をもって録音に耳を傾けるのだ。

しかしながら二〇世紀の半ばを過ぎたあたりから、「いまだかつてどこにも存在したことのない身体が奏でる音楽」を、電気によって自在に作り出すことができるようになり始める。いまだきの若い人ならヴォーカロイドを連想するだろう。

（岡田暁生『音楽と出会う——21世紀的つきあい方』による）

*1 スカイプ……音声・ビデオ通話を行うアプリケーション。

*2 蓄音機……十九世紀半ばから普及した、音声の再生装置。箱型の台座のうえに、ラッパ状のホーンが付いている形状が一般的で、音声が録音された、円盤状のレコードを再生する。アメリカの発明家・エジソン（エディソン）が開発・普及に携わった。

*3 『魔の山』……一九二四年に出版された、トーマス・マン（独）の小説。二十世紀初頭のドイツが舞台。

*4 櫃……大きい箱。キリスト教の「聖櫃」には、宗教上の特別な用具や、聖人の遺体が収納された。

問一 二重傍線部①⑧の漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 波線部「これは卓見だ」について、「卓」と同じ漢字を含むものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 業務をイタクする。

イ 原野をカイタクする。

ウ 議案をサイタクする。

エ タクハイ便を依頼する。

オ タクエツした業績。

問三 空欄部

A

D

 に入る最も適切な語をつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度

以上使用しないこと）。

ア しかし イ もちろん ウ または エ つまり オ たとえば

問四 空欄部「X」

Y

「Z」に入る最も適切な語をつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度以上使用しないこと）。

ア 小説 イ 演劇 ウ 建築 エ 映画

問五 傍線部 a 「今ここ、私のそばに、誰かがいる」という絶対的な証」について、このようにいえる理由として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 録音技術が生まれる以前は、誰も人がいないのに音楽が聞こえるようになることなど、絶対に信じようとしなかったから。

イ 録音技術が生まれる以前は、誰かがそばで音を鳴らさない限り、周囲で音楽が聞こえることはありえなかったから。

ウ 録音技術が生まれる以前は、誰にとっても音楽とは、直接ライブやホールを訪れ演奏者のそばで聞くものだったから。
エ 録音技術が生まれる以前は、誰もそばにいないのに聞こえてくる音楽は、過去の幽霊の演奏だと考えられていたから。

問六 空欄部（ I ）に入る最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア そこで私が音を聞いていた

イ どこかの誰かが私に音を鳴らす

ウ どこか遠くで誰かが音を鳴らす

エ 音を鳴らす誰かがそこにいる

問七 傍線部 b 「初めてレコードを聴いた客」について、初めて録音された音楽を聴いた『魔の山』の登場人物達の様子として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 最初は当惑したが、やがて箱の中に誰もいないことを理解した。

イ 聴衆達も、箱から聞こえる音楽に、声を合わせて合唱した。

ウ 音楽家がそこにいるかのように、惜しみない称賛を送った。

エ 箱に隠れてむずかしいオペラを歌っていると思つて、興奮した。

問八 傍線部c「最初とは少し違った当惑」について、録音技術に慣れてきた『魔の山』の登場人物は、どのような点に当惑しているか。本文中から二十字以上二十五字以内で抜き出し、最初の八字を答えなさい（ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること）。

問九 空欄部（Ⅱ）に入る最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 精神 イ 霊魂 ウ 器械 エ 行動 オ 身体

問十 傍線部d「音楽が持っていた根源的な何か」について、筆者は「音楽が持っていた根源的な何か」をどのようなものだと考えているか。それを示す一文を本文中から抜き出し、最初の八字を答えなさい。

問十一 傍線部e「確かに録音で聴く音楽にはどこか幽霊じみたものがある」について、筆者がこのように考える理由として適切ではないものをつぎの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 録音の発明が人間の音楽身体を作りかえ、いまだかつてどこにも存在したことのない身体でも、音を奏でられるようになったから。

イ 録音技術によって、たとえ演奏者の肉体はなくなっても、その声や演奏を保存することができるから。

ウ 録音メディアの出現当時を描いた『魔の山』も、蓄音機の箱を「魔法の櫃」「棺ふうの箱」等と表現しているから。

エ 録音から聞こえる音楽を奏でた演奏者は、もはやこの世に存在しない、死者であるかもしれないから。

問十二 傍線部 f 「録音された音には必ず特定の人間のリアルな身体が対応していた」とあるが、どういうことか。最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 録音された音に対しても、人々の身体は、生の演奏を聞くときと同じ興奮や安堵を覚えたということ。
- イ 録音された音に対しても、人々は、現実の演奏者が今そこにいるかのような反応をみせたということ。
- ウ たとえ録音された音であっても、その人の身体が発した音を、忠実に複製していたということ。
- エ たとえ録音された音であっても、その音を発生させた生身の身体が、必ず存在したということ。

問十三 傍線部 g 「聖者の遺骸を崇めるかのようにして聴く」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

- ア すでに過去の人となった、伝説的な演奏者が遺した録音を、そこに電気が利用されていることを知りつつも、まるで本物の演奏かのようにリアルに感じるということ。
- イ すでに存在しない、素晴らしい演奏者が遺した録音を、それが彼らの生身の演奏ではないことを知りつつも、まるで演奏者の身体が奏でているかのように尊ぶということ。
- ウ すでに死んでしまった、偉大な演奏者が遺した録音を、彼らが亡くなっていることを知りつつも、まるで死者が今ここに生き返ったかのように、生々しくうけとめるということ。
- エ すでに肉体は消滅した、有名な演奏者が遺した録音を、それが彼らの亡霊のようなものであることを知りつつも、まるで本物の声であるかのように神聖視するということ。

問十四 本文の内容の説明として適切なものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 電気登場以前の音楽が持っていた根源的な何かは、二〇世紀半ばに、いまだどこにも存在したことの無い身体が奏でる音楽が出現し、一変してしまった。

イ 録音メディアが登場した当初の様子を描いた『魔の山』は、電気の出現で音楽の聞き方が変わったことを、人物達の反応を通して批判的に描いている。

ウ かつては録音された音にも、必ず人間のリアルな身体が対応していたが、今日ではどこにも存在したことの無い身体が奏でる音楽を、自在に作りだすことができる。

エ 録音技術以前、音楽は「今ここ、私のそばに、誰かがいる」ことの絶対的な証だったが、今日の私たちは、音を鳴らす人の不在を当然だと思っている。

オ 生の音楽と電気を通した音楽は根本的に別のもののはずだが、現在の人々にとって、電気を通さない音楽を聞くことはもはや不可能になってしまった。

問十五 電気で音楽が聴かれるようになった約百年前は、日本では大正期～昭和初頭に当たる。この時期に活躍した小説家・梶井基次郎は、自身も西洋音楽を愛好し、音楽に関連した作品やエッセイを多くのこしている。梶井基次郎の作品をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 城の崎にて イ セロ弾きのゴージュ ウ 斜陽 エ 風立ちぬ オ 檸檬

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい（ただし、設問の都合上変更した箇所がある）。

「日本には自由はない」と言っていると思います。勘違いしてほしくないんですけど、日本には「その代わりになるもの」がある。

日本人にとって、気が楽になるとか、心持ちが落ち着くとか、肩の荷が下りた気がするとかいうのは「自由を達成した」からではないんです。すべての外的な干渉を退けて、自分の思いの通りのことを実践するということを日本人はほんとうは望んでいない。だって、そんなの大変そうだから。それよりは、ほっとしたい、気楽でいたい。

集団の中にいると、さまざまな相互にムジュン^①したり対立したりする要請を調整しなければならないということがあります。それがうまく折り合って、「落としどころ」に話が落ち着いたときに、日本人は解放感と達成感を覚えます。理不尽な要求をされても、身勝手なことを言われても、それでも、あちこち走り回り、あちらの顔も立て、こちらの言い分も通して……というような困難な調整を果たして、もろもろの干渉が相互に相殺されて、一種の「ニュートラル」状態を達成したときに、日本人はなぜか深い満足感を覚える。これはどう考えても、ヨーロッパ的な「自由」¹とは似ても似つかぬものです。

ヨーロッパの街でびっくりさせられるのは夏の終わりの少し肌寒い日に「もう」毛皮のコートを着ている人と、「まだ」半袖半ズボンの人が並んで歩いている風景を見ることです。彼らは自分の身体感覚に従って何を着るか決めている。他人が何を着ようと気にしない。その「周りを気にしない」様子を見ると、「ああ、これが自由というものなんだな。日本人にはないなあ」と思います。

【 a 】日本にも「周りを気にしない様子」をする人はいますけれど、そういう人は「周りを気にしないオレってすごい」「オレは凡人じゃないんだぜ」ということをうるさくアピールしてくる。自由であるべきときにすでに肩肘張^②っている。それは周りが半袖でも、「オレは寒いから」と毛皮を着ている人の「自由」とは質が違います。

【 b 】日本人はヨーロッパ的な意味での「自由」を求めているんじゃないかと思います。だって、日本社会で「私は自由に生きています」とアピールする人は総じて緊張しているから。でも、おでこに「私は自由人です。凡人ちゃいます」というシールを貼って、こまめに周りの承認を求めようとするなんて、野暮^③ですよ。

ユーラシア大陸の辺境^④に位置する日本列島には、外から次々と新しい集団が到来し、新しい文物が流入しました。そして、そのつど対立せず、排除せず、折り合いをつけてきた。「そちらにはそちらのお立場が、こちらにはこちらのメンツが。どうです、一つナカをとって……」というのが日本における問題解決のもっとも成熟したマナーでした。

それは正解を得るための方法ではないのです。

X

です。原理を貫徹する、信教や思想に殉じるという^⑤

ことを日本人はあまり好まない。それよりは非妥協的な対立を折り合わせる調整能力が尊ばれる。

^{*1}大岡裁きの「三方一両損」なんていうソリユーションはヨーロッパ人はまず受け付けてくれないでしょう。なぜきちつと決着をつけないのか、と。^{*2}サンデル教授の「ハーバード白熱教室」ってありましたけど、日本人だったら、「さあ、正解はどっちだ」と切り立てられたら、「まあ、そう言わずに、どうですお茶でも一杯」というかたちで「白熱しない」方向に誘い込もうとするんじゃないでしょうか。

ハリウッド映画を見ると、組織内でさまざまな利害や立場が衝突して大変ケン^⑥アクになるという場面によくお目にかかります。でも、あれこれの言い分にすべて耳を傾けて、全員が納得するような「あつと驚く」

Y

を提案する上司というのは、映画の中ではまず見ることがありません。激烈なディベートのあとに、最終的に誰かの意見が「正しい」ということになって、意見が通らなかつた者は憤然と席を蹴って会議室を出てゆく。これが欧米風なんだろうと思います。

自分のやりたいことを旗幟^{きしせんめい}鮮明に掲げて、そのアジェンダ^{*3}に賛成する人間を登用し、反対する人間は排除する。その方が「話が早い」と人々は信じている。^{II}

でも、日本人はちよつと違う。「いやゝ、悪いねえ。どう、今回はちよつと泣いてくれない？ いや、悪いようにはしないよ。次には必ず埋め合わせするから」みたいなやりとりのことを「仕事」だと称している。欧米のビジネスマンだったら、「そのどこが仕事なんだよ」と怒り出すでしょう。

でも、それはしようがないと思うんです。「相容れない立場をなんとか折り合わせる能力」こそが列島住民が生き延びるために優先的に開発してきた資質なんですから。列島民たちはそういう生存戦略で2000年くらいやってきたわけで、いまさら変えろといわれても無理ですよ。

ですから、「最近、自由がなくなってきたと感じる」という声があったそうですけれど、僕はそれは違うと思います。
自由なんか前からなかったんだから。

(内田樹『生きづらさについて考える』による)

*1 大岡裁きの「三方一両損」：古典落語にある話。財布を落とした者とそれを拾った者、そしてその対立する二人の主張について裁定を下した奉行所の、三者が等しく一両ずつ損をする提案で円満に解決したというもの。

*2 サンデル教授の「ハーバード白熱教室」：アメリカのハーバード大学での講義。サンデル教授が正解のない問題について学生たちに議論させ、議論白熱の授業となった。

*3 アジェンダ：計画等の意味をもつ語。ここでは会議において示された大方針の意で使われている。

問一 波線部①～⑥の漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 空欄部【 a 】【 b 】に入る語として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a	ア	もちろん	イ	しかし	ウ	なぜなら	エ	そして
b	ア	あたかも	イ	または	ウ	しかるに	エ	だから

問三 傍線部Ⅰ「ヨーロッパ的な「自由」とは似ても似つかぬものです」について、ヨーロッパと日本との違いを説明したつぎの文章の空欄部 A B に入る語句として最も適切なものをあとの選択肢の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度以上使用しないこと）。

ヨーロッパの「自由」がすべての外的な干渉を A ことであるのに対して、日本はその代わりとして他者との対立や衝突を B ことを実践している。

ア 管理する イ 排斥する ウ 解放する エ 回避する

問四 空欄部 X に入る語句として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 緊張を緩和するためのアピール イ 目立つことを忌避する処方箋
ウ 多様性を認めるための妥協策 エ いざこざを避けるための作法

問五 空欄部 Y に入る語として最も適切なものを本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部Ⅱ「その方が「話が早い」と人々は信じている」について、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の主張とは齟齬があっても、他者の言い分に耳を傾けて自他の利害を斟酌し、誰もが賛成する「正しい」意見を練り上げの方が長期的に有効であると考えているから。

イ 自分の主張に反対する人々を排除して、賛成する人々だけを要職に充てて自分の周囲に配置することこそが組織の団結力を高めるための最善策であると考えているから。

ウ 他者の主張を受容して活用するのではなく、自分が主張する「正しい」に反対する者を放逐することこそが、非妥協的な衝突に対する合理的な解決であると考えているから。

エ 自分の主張を明瞭に説明することこそが、激烈なディベートを長引かせることなく「正しい」意見に反対する者を効率的に退室させる極意であると経験的に知っているから。

問七 二重傍線部「日本には「その代わりになるもの」がある」について、筆者の考えを説明したものとして最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 欧米人が他者と衝突してでも実践する、他者による干渉から自由になろうとすることを、日本人は衝突する利害に折り合いをつけて決着を実現した時に得られる解放感で代替している、ということ。

イ 欧米人が他者を排除してでも実現する、自分を優先するという自由を、日本人は自他の自由を調整して得られる全員の平等な不自由で代替している、ということ。

ウ 欧米で自他が相互に自由を主張する文化が育まれたのは、外部からの影響を遮断していたためであるのに対し、日本には自由はないが代替として世界に誇れる開放性はある、ということ。

エ 欧米で自己主張の貫徹が尊ばれたのは、他者と衝突してでも実現すべき自由があつたためであるのに対し、日本には自己主張はないが代替として人間関係を大切にする文化はある、ということ。

問八

授業で本文を読んだSさんは、日本には「自由なんか前からなかった」について考える課題を与えられ、次の《文章》を書きました。このことについて、つぎの(1)・(2)の問いに答えなさい。

《文章》

「日本には自由などなかった」について、本当にそうなのかを考えることにした。確かに、ファッションひとつを取り上げても、今年の「流行」のようなものがあるから、本当に自分が着たい服だけを着られるわけではない。また、一緒に出かける友人との服装の取り合わせも考えなければならぬから、本当に自由かと問われればそうではないということになるだろう。しかし、自室の中で一人で過ごすときはパジャマでもジャージでも周りを気にせず好きなように着られるということもある。これはこれでひとつの自由ということになるだろう。だから、「自由などなかった」というのは常に公共の場で他者と関係している場面においてのみ、ということになるのではないだろうか。私的な場所にあつては自由があつたのではないだろうか。だとすると、他者との関係性が生じない時間・空間・機会においては自分の「着たい」を追求し、他者との関係性にあつては周囲とのZを目標してきた、というのが正確なのではなかろうか。すると、日本人の「自由」は周りからは「見えづらい」ということになるだけなのであろう。まったく無かつたというわけではないのだと考えた。

(1)

空欄部

Z

に入る語として最も適切なものを、本文中にはない語句で、解答欄に合うように答えなさい。

(2) この《文章》をクラスで発表したところ、クラスメイトたちからのコメントがあった。このときのコメントとして適切なものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 欧米風の自由と日本風の調整との、双方の利点を兼ね備えた「機会によって使い分ける」という考えは優れている。これを結論とするのが良いので、「日本に自由がなかったならば、今後これを取り入れるにはどうすべきか」から書き始めるのが良い。

イ 本文では日本には「自由」がなかったと述べられているが、近年のSNS等には「自由人」が多く登場して盛んに発信し、人々の支持を集めている。だから、こうした事実の具体例を挙げて本文の主張に疑義を提出し反論を試みる方が意欲的で良い。

ウ 自分の周囲にいる他者がどう思うのかを気にしない欧米風の自由は、ともすれば周囲との軋轢の原因になりかねない自分勝手に陥るといふ本文の主張を取り入れて、むしろそうした自分勝手の例を具体的に挙げて本文の事例的補足との方が良い。

エ 欧米風の自由と日本風の調整との、双方の利点を兼ね備えた「機会によって使い分ける」という提案は優れているが、その事例列挙としてファッションを用いるのは、国語担当のベテラン教員に分かりづらいだろうから落語や囲碁を取り上げるのが良い。

オ 公私で調整と自由を使い分けるのが日本だというのは一見説得力があるが、本文中における欧米風の自由はすべて公共空間についての議論であって私的空間の問題には一切触れていないのだから、それに対する議論もまた公共空間に絞った方が良い。

2025年度入学者選抜（B日程・2月4日）【60分】

国語試験問題

「現代の国語」、「言語文化」（小説・漢文を除く）

学芸学部…日本語日本文学科

一

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい（ただし、設問の都合上変更した箇所がある）。

「カビの生えたような学問」という言葉があるが、私がやっているのは「カビが生える学問」である。私が主な研究材料にしている、いもち病というイネの病原菌は、子の菌という真菌（カビ）に属している。カビの生えたような学問①というとき、セマク薄暗い研究室で白衣を着た学者が顕微鏡をのぞいているというようなイメージがあるが、この時代にあつてカビに興味をもつ研究者というのは、どこことなくそれに通じるものがある。アメリカのカリフォルニア州にあるアシロマ会議場で（ここは1975年に国際的な遺伝子組み換え実験のガイドラインが打ち出されたことで有名なアシロマ会議が開かれた場所でもある）、2年に1度、世界中の「カビマニア」がイチドウに会する Fungal Genetics Conference②という学会が開かれるが、その比較的小さな国際会議の本造の薄暗い会議場には、どこことなく古き良き時代のサイエンスの芳香が漂っている③。

今さら言うまでもなく、現代では自明の善としていろんなことが開かれていく方向に進んでいる。開かれたこと（a）情報④の交換や物質の流通などが、物事の健全な発展のために必要なことは論を俟たない。そういう意味では、この時代は過去と比べて本当に恵まれていると思う。大陸間の移動でさえ、豊かな国では普通の庶民が無理なく行えるようになり、欲しいと思う情報のほとんどはインターネットやテレビなどの通信手段によって手に入る。こういう「開かれたこと」が現代社会の基礎を作り、その

発展に大いに寄与していることは、もう圧倒的に明らかなことである。

けれど、一方で私が最近とみに思うのは、もつと^B閉じられたこと^④というものの大切さが意識されても良いということだ。昨今のフウチョウは、^④「閉じられたこと」の持つエネルギーや密度について、あまりに無頓着になっているような気がする。開かれたということ、誰の目にも見て分かる「昼の力」とするなら、閉じられたことは、簡単には見えない「夜の力」みたいなものだ。基本的に純度のあるものは、閉じられているから存在できる。赤い絵の具を池の中に落とせば、その色はなくなってしまう。どんなものであっても、その偏りや純度を保つためには閉じられた時空間が必須だ。そのことの意義は意外に大きいと思う。

その文脈で言えば、昔、日本は島国で鎖国までしていた。その閉じられた時空間の中で、日本の文化というのは育まれてきた。ちょんまげや羽織袴、刀、お城そして日本語、そういうものが、その文化の中である種の密度を持ち存在した。(b)、明治以後、多くのものを開き、西洋文化を取り入れてきたことで、たとえば着物文化というようなものは、その内在的な文化としての力を失ってしまったように見える。こんなことを言うのも不謹慎かも知れないが、以前は、もし日本という国が圧倒的な軍事力を持ち、世界を席卷していたら、世界のみんなが着物を着るようなことになっていた、そんな未来の世界の姿の一つとなる可能性を内包する密度と力を持って存在していたと思う。しかし、残念ながら現在ではすでに着物に、そういった未来の世界の姿を担うだけの密度はないような感じがする。^C垣根を取り払い、開かれたことで、相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく。この日本語という言葉も、日本人の英語下手という壁に守られ、現在はまだ生命力のある言葉として存在しているが、幼い頃からの英語教育が^⑤サカンになり、大学の授業は英語だ、社内の公用語は英語だ、といった状況が進んでいけば、かつてのネイティブアメリカンやマヤの人たちの言葉が実質的に失われていったように、日本語という文化も一部の収集家によって保存されるだけのものになっていくのかも知れない。英語を第二公用語にしようというような話が持ち上がる我が国であるから、それもまったくあり得ない話ではない。

もちろん着物も日本語もローカルな文化で、そんなものに執着する必要はないという人もいるだろう。私も特に着物を着たいとは思わない方だが、私がここで問題としているのは、文化的アイデンティティーとか愛国心とか、そういうことは少し違う。たとえばガラパゴス諸島やオーストラリア大陸で、独自の進化が起こり、我々から見ると^⑥キミヨウな生物たちが繁栄したのは、これ

らの地域が地理的に隔離されていたことが最も重要な要素だったことは疑う余地がない。閉じられたこと^Gが、その時主流となっている事象と、その亜種や改良版ではない、まったく違った形の生き物や文化を生む母体となっているのだ。閉じられたこと^Dには、そういう力があるのではないかと思う。

何の形も境界もない混沌の中から、何かが形を作っていく時。そしてそれが醸熟し、萌芽していく時。そこでは、わずかな風が外から吹き込むのも嫌がるような、外界とのつながりが一旦遮断された、濃密で、閉鎖的な時空間が必要とされることがあるのかも知れない。そういえば子宮もある意味、閉じられた空間だ。そのイメージの延長線上にある。

こういった考え方は、本当に新しいものが求められる芸術の世界では古くから大切にされてきた。秘められた感情、抑圧された情熱、そういった簡単には人に話せない、心の奥に封じ込まれた物語が洗練され、閉じられた空間から一気に日の当たる場所に解放される時、多くの人を感動させる力を持った芸術になる。閉じられたこと^Eが生む、ある種の偏り、純度の高さ、内圧のようなエネルギーの蓄積。描いては消し、消しては描く、その無駄で贅沢な作業。そして「小さな世界」の genesis^{*1}。

閉じられたことは、育てること、に通じている。他と混じってしまえば、蹴散らされてしまうようなもの、色が消えてしまうようなものが、閉じられた空間だからこそ成長でき、成熟し、ある種の「世界」を作りあげることが可能となるのだ。

グローバリゼーションだ、グローバルスタンダードと言うが、あらゆるものを混ぜて競わせれば、その結果、生き残るのは競争力や戦闘力という「偏った特徴」が強いものばかりになる。競争で選抜されるのは、実は限られた観点から見た優位性である。戦争に強い民族が、常に病気に強い訳でも、絵が上手い訳でも、足が速い訳でも、他人への思いやりに溢れている訳でもない。一つの観点で強い選択圧をかけてしまえば、その陰で多様で独自の特色を持った多くの形質が失われてしまいかねない。

(c) 経済で言えば、「消費者により良いものをより安く届ける」ことが天上天下唯一無二の正義のように言われているが、より安くを追求すれば、最も優れた企業とは、人件費がゼロ、つまり奴隷を使う企業である。社員を、あるいは国民を、どこまで奴隷に近づけることができるか、そんな競争をしてはいないだろうか？ 非関税障壁はなくすべきだ、みんなが同じように競争し、

容易に理解し合えるようにすべきだと言え、世界中の言語は英語だけでいい。独自の文化は基本的にすべて非関税障壁である。ほんのちよつとばかり安いものを手に入れるために自分たちの文化を捨てるべきかどうか、少し頭を冷やして考えれば、すぐに分

かることではないか？

人類は、ある意味、世界の各地にある小さな閉じられた空間の中で、多くの独自の文化や社会の豊かさを育んできた。かつては世界のあちらこちらに、閉じられた袋があり、それを開けるたびに独自の文化や物語が見つかり、そこに新鮮な驚きがあったのだ。それらは長い時間をかけて、その場所で、醸成されてきたからこそ独自のものだった。世界が開かれ、世界中の子どもがデイズニーしか見なくなったとして、そこに本当に新しい物語を作る力が、果たして残っているのだろうか？

そして今、大学もそういったグローバル化の中にある。今の大学は、閉じられた時空間^⑥ などという贅沢なものと本当に無縁の世界になっている。何かが育つのを待つようなゆつくりとした時間や空間はない。たくさんの情報が流れ込み、それに対する多くの出力がすぐに要求される。目の前にあることをとりあえず「こなす」ことで、時間が過ぎていく。一つ一つの事項を取れば、文句を言う筋合いはない「必要で大切な」案件が並ぶ。しかし、これが全体として見れば、まったく不毛で H なことに限りなく近づいているのは、一体どうしてなのだろうか？

昼と夜が交互に来るように、洪水のように流れてくる情報を、もう一度静かな、小さな空間の中で動きを止め、遅々としていても密度のあるものに練り直す^⑦、そういう作業が可能だろうか？ そのために私たちは何をすべきなのだろうか？

カビの胞子が発芽する。菌糸が伸びて、ビロードの絨毯のように幾重にも重なった、びっしりとした菌糸のマットが少しいびつな円形のコロニー^{*3}を作る。先端の白い菌糸から内側の灰色の菌糸へ移相するグラデーションとその僅かな菌糸の濃淡が規則的な幾何学模様を作り、その上に白い気中菌糸が立体的で規則性の捉えがたい複雑な形を描いていく。わずか直径9センチメートルのシャーレの小さな閉じられた空間で、カビが「世界」を作っている。シャーレのフタを開けた時、吹き出すような香りがする。^I「カビが生える学問」の薫りだ。

(中屋敷均『科学と非化学 その正体を探る』による)

*1 genesis ……ものの起源。始まり。

*2 非関税障壁……貿易における関税以外の障壁や制約。

*3 コロニー……細菌などを培養したときの、肉眼で見える集まり。

問一 二重傍線部①⑧の漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 空欄部（ a ）（ c ）に入る最も適切な語句をつぎの中から選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度以上使用しないこと）。

ア あるいは イ しかし ウ すると エ だから オ つまり

問三 傍線部A「白衣を着た学者」の文法的な説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 使われている品詞の種類は、名詞、助詞、動詞の三つである。

イ 使われている品詞の種類は、名詞、助詞、動詞、助動詞の四つである。

ウ 使われている品詞の種類は、形容詞、名詞、助詞、動詞、助動詞の五つである。

エ 使われている品詞の種類は、連体詞、名詞、助詞、動詞、助動詞の五つである。

問四 傍線部B「閉じられたこと」の「こと」を具体的に言い替えている漢字三字の語句を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 傍線部C「垣根を取り払い、開かれたことで、相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく」について、つぎの(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく」ということの説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 相対的に弱い文化の受容者が減少し、その文化圏において文化の継承が衰微すること。

イ 相対的に弱い文化の受容者が増加し、その文化圏において人々の連携が衰微すること。

ウ 相対的に弱い文化の受容者が若年化し、その文化圏において人々の交流が変化すること。

エ 相対的に弱い文化の受容者が高齢化し、その文化圏において物資の流通が変化すること。

(2) 筆者が傍線部Cのように見なす根拠の示されている三十字以内の一文をこれより前の本文中から抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい(ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること)。

問六 傍線部D「そういう力」を次のように説明した場合、空欄部 ア(五字) イ(九字) に入る指定の字数の語句をこれより前の本文中から抜き出して答えなさい。

▽「そういう力」とは、ア を引き起こす力であり、それまでとは異なる イ 力である。

問七 傍線部E「ある種の「世界」を作りあげることが可能となる」状況によって引き起こされる事柄として適切なものには○、不適切なものには×で答えなさい。

- ア 秘められた感情や抑圧された情熱が洗練されること。
- イ 優位性のためにあらゆるものを混ぜて競わせること。
- ウ 企業が唯一無二の正義を主張して社員を酷使すること。
- エ 世界中の子どもがディズニー映画しか見なくなること。

問八 傍線部F「その陰で多様で独自の特色を持った多くの形質が失われてしまいかねない」とあるが、筆者がこのように考える根拠として示されている過去の海外の事例を述べた部分を三十六字で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい(ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること)。

問九 傍線部G「世界中の言語は英語だけでいい」とあるが、筆者は、これが現実となった場合、他言語はどのようなものになる可能性があるかと述べているか。解答欄に合う形でその部分を二十字で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい(ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること)。

問十 空欄部 H に入る最も適切な四字熟語をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 完全無欠 イ 清廉潔白 ウ 本末転倒 エ 勇猛果敢

問十一 傍線部Ⅰ「カビが生える学問」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「カビが生えたような学問」の換言として、〃閉じられたこと〃の凡庸性を暗示している。
イ 〃閉じられたこと〃の中で起きる活性を示して、学問の国際化への同調を暗示している。
ウ 古き良き時代のサイエンスへの反省として、〃閉じられたこと〃の可視化を暗示している。
エ 〃閉じられたこと〃の可能性を示して、グローバルゼーションへの警鐘を暗示している。

問十二 本文の内容に合うものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、現代社会の〃開かれたこと〃については、〃閉じられたこと〃の持つエネルギーや密度に対して無頓着となる原因であると思なして終始批判的な言及をしている。
イ 筆者は、着物文化も日本語もローカルな文化となってしまうと嘆き、着物を着たいとは思わないと虚勢をはりつつ文化的アイデンティティーや愛国心を懐古している。
ウ 筆者は、芸術の世界では古来〃閉じられたこと〃への尊重があると理解しており、閉じられたことが有する生む力や育てる力が芸術の世界を作り上げていると認識している。
エ 筆者は、人類が世界のあちらこちらにある小さな空間で多くの独自の文化や社会の豊かさを育んできたことを知っているのも、今の大学のグローバル化にも賛同している。
オ 筆者は、今の大学が情報の面で外界とのつながりを一旦遮断することが可能であるのかどうかを考えつつ、研究者である自分たちが何をすべきであるのかを模索している。

問十三 この文章の表現の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文末を常体で記す文章で、若干の口語的な表現も交えて馴染み易さを添えている。
- イ 文末を常体で記す文章で、卑俗的な表現も多用して馴染み易さを添えている。
- ウ 文末を敬体で記す文章で、若干の漢文的な表現も交えて学術性を高めている。
- エ 文末を敬体で記す文章で、翻訳的な表現も多用して学術性を高めている。

問十四 『かび徴』の作者徳田秋声や『蒲団』の作者田山花袋などとともに自然主義文学の担い手として活躍した作者をア～エの中から

選び、記号で答えなさい。また、その作者の作品をカ～ケから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|-----|---|------|---|-------|---|-------|---|------|
| 作者… | ア | 島崎藤村 | イ | 谷崎潤一郎 | ウ | 夏目漱石 | エ | 樋口一葉 |
| 作品… | カ | それから | キ | 春琴抄 | ク | たけくらべ | ケ | 破戒 |

二 つぎの文章は、『大和物語』の一節である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

亭子の帝、鳥飼とりかひ院*におはしましにけり。例のごと、御遊びあり。「このわたりの浮かれ女ども、あまたまゐりてさぶらふなかに、声《a おもしろく》、よしある者は侍りや」と問はせたまふに、浮かれ女ばらの（A 申す）やう、「大江の玉淵がむすめと申す者、めづらしうまゐりて（B 侍り）」と申しければ、見せたまふに、さまかたちも清げなりければ、あはれがりとまうて、うへに召しあげたまふ。「そもそもまことか」など問はせたまふに、鳥飼といふ題をみなみな人人によませたまひにけり。仰せたまふやう、「X はいとらうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらむにしたがひ

て、まことの子とは思はさむ」と仰せたまひけり。うけたまはりて、すなはち、

浅緑かひある春にあひぬれば霞ならねどたちのほりけり

とよむ時に、帝、¹ののしりあはれがりたまひて、²御しほたれたまふ。人人もよく酔ひたるほどにて、酔ひ泣きいになくす。帝、御¹桂ひとかさね、袴たまふ。「ありとある上達部、²みこたち、四位五位、これに物脱ぎてとらせ¹ざらむ者は、座より立ち《b ね》」と（C のたまひ）ければ、かたはしより、上下みなかつけたれば、かづきあまりて、二間ばかり積みてぞ置きたりける。かくて、かへりたまふとて、南院の七郎君といふ人ありけり。それなむ、この浮かれ女の住むあたりに、家つくりて住むと聞こしめして、^①それになむ、のたまひあづけたる。「かれが申さむこと、院に奏せよ。^②院よりたまはせむ物も、かの七郎君につかはさむ。すべてかれにわびしき目 Y 見せそ」と仰せたまうければ、つねになむとぶらひかへりみける。

* 鳥飼院……摂津国の鳥飼にあった離宮。

問一 二重傍線部1「桂」 2「上達部」の漢字の読みをひらがな（現代仮名遣い）で答えなさい。

問二 《a おもしろく》《b ね》のそれぞれの品詞・活用形・終止形を、つぎの例にならい答えなさい。

例Ⅱ あり（品詞）動詞（活用形）終止形（終止形）あり

問三 波線部Ⅰ「ざら」Ⅱ「奏せよ」をそれぞれ終止形に直して答えなさい。

問四 (A 申す) (B 侍り) (C のたまひ) の敬語について該当するものを(1)・(2)の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい(ただし、同じ記号を何度使用してもよい)。

(1) 敬語の種類

ア 尊敬 イ 謙讓 ウ 丁寧

(2) 敬意の方向

ア 作者から帝 イ 作者から浮かれ女ばら ウ 浮かれ女ばらから帝 エ 上達部から帝

問五 空欄部 X に入る最も適切な語をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 帝 イ 浮かれ女ばら ウ 玉淵 エ 玉淵がむすめ

問六 傍線部1「ののしりあはれがりたまひて」の現代語訳として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア たいそうしみじみと嘆息し同情なさって
イ 大きな声でかわいそうだとおっしゃって
ウ 大きな声をあげてとても感心なさって
エ たいそう激しく罵倒し悲しがられて

問七 傍線部2「御しほたれたまふ」を現代語訳して答えなさい。

問八 二重傍線部①「それ」②「かれ」に該当する人物をそれぞれつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 亭子の院 イ 玉淵がむすめ ウ 浮かれ女ばら エ 七郎君

問九 空欄部 Y に入る適切な語を平仮名一字で答えなさい。

問十 つぎの中から本文の内容と合致しないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 帝は鳥飼院で管弦の遊びを催した。

イ 玉淵がむすめは帝の実子と分かった。

ウ 玉淵がむすめは鳥飼という題の歌を詠んだ。

エ 鳥飼という題の歌を帝も詠んだ。

オ 玉淵がむすめに多くの褒美が与えられた。

カ 七郎君は玉淵がむすめの世話を帝から言いつけられた。

問十一 本文は『大和物語』である。この作品と同じジャンルの作品をつぎの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 落窪物語

イ 源氏物語

ウ 伊勢物語

エ 竹取物語

2025年度入学者選抜（B日程・2月4日）【60分】

国語試験問題

「現代の国語」

学芸学部…英語文化コミュニケーション学科・子ども教育学科・
メディア情報学科・生活デザイン学科
人間社会学部…社会マネジメント学科・人間心理学
栄養科学部…健康栄養学科・管理栄養学科
短期大学部…食物栄養学科

一

つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい（ただし、設問の都合上変更した箇所がある）。

「カビの生えたような学問」という言葉があるが、私がやっているのは「カビが生える学問」である。私が主な研究材料にして
いる、いもち病というイネの病原菌は、子のう菌という真菌（カビ）に属している。カビの生えたような学問というと、セマク薄
暗い研究室で白衣を着た学者が顕微鏡をのぞいているというようなイメージがあるが、この時代にあつてカビに興味をもつ研究者
というのは、どこことなくそれに通じるものがある。アメリカのカリフォルニア州にあるアシロマ会議場で（ここは1975年に国
際的な遺伝子組み換え実験のガイドラインが打ち出されたことで有名なアシロマ会議が開かれた場所でもある）、2年に1度、世
界中の「カビマニア」がイチドウに会する Fungal Genetics Conference^②という学会が開かれるが、その比較的小さな国際会議の
本造の薄暗い会議場には、どこことなく古き良き時代のサイエンス^③の芳香が漂っている。

今さら言うまでもなく、現代では自明の善としていろんなことが開かれていく方向に進んでいる。開かれたこと（a）情

報の交換や物質の流通などが、物事の健全な発展のために必要なことは論を俟たない。そういう意味では、この時代は過去と比べて本当に恵まれていると思う。大陸間の移動でさえ、豊かな国では普通の庶民が無理なく行えるようになり、欲しいと思う情報のほとんどはインターネットやテレビなどの通信手段によって手に入る。こういう「開かれたこと」が現代社会の基礎を作り、その発展に大いに寄与していることは、もう圧倒的に明らかなことである。

けれど、一方で私が最近とみに思うのは、もっと「閉じられたこと」というものの大切さが意識されても良いということだ。昨今のフウチョウは、^④「閉じられたこと」の持つエネルギーや密度について、あまりに無頓着になっているような気がする。開かれたということ、誰の目にも見て分かる「昼の力」とするなら、閉じられたことは、簡単には見えない「夜の力」みたいなものだ。基本的に純度のあるものは、閉じられているから存在できる。赤い絵の具を池の中に落とせば、その色はなくなってしまう。どんなものであっても、その偏りや純度を保つためには閉じられた時空間が必須だ。そのことの意義は意外に大きいと思う。

その文脈で言えば、昔、日本は島国で鎖国までしていた。その閉じられた時空間の中で、日本の文化というのは育まれてきた。ちよんまげや羽織袴、刀、お城そして日本語、そういうものが、その文化の中である種の密度を持ち存在した。(b)、明治以後、多くのものを開き、西洋文化を取り入れてきたことで、たとえば着物文化というようなものは、その内在的な文化としての力を失ってしまったように見える。こんなことを言うのも不謹慎かも知れないが、以前は、もし日本という国が圧倒的な軍事力を持ち、世界を席卷していたら、世界のみんなが着物を着るようになっていた、そんな未来の世界の姿の一つとなる可能性を内包する密度と力を持って存在していたと思う。しかし、残念ながら現在ではすでに着物に、そういった未来の世界の姿を担うだけの密度はないような感じがする。^c垣根を取り払い、開かれたことで、相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく。この日本語という言葉も、日本人の英語下手という壁に守られ、現在はまだ生命力のある言葉として存在しているが、幼い頃からの英語教育がサカ^⑤んになり、大学の授業は英語だ、社内の公用語は英語だ、といった状況が進んでいけば、かつてのネイティブアメリカンやマヤの人たちの言葉が実質的に失われていったように、日本語という文化も一部の収集家によって保存されるだけのものになっていくのかも知れない。英語を第二公用語にしようというような話が持ち上がる我が国であるから、それもまったくあり得ない話ではない。

もちろん着物も日本語もローカルな文化で、そんなものに執着する必要はないという人もいるだろう。私も特に着物を着たいとは思わない方だが、私がここで問題としているのは、文化的アイデンティティーとか愛国心とか、そういうことは少し違う。たとえばガラパゴス諸島やオーストラリア大陸で、独自の進化が起こり、我々から見るとキミヨウな生物たちが繁栄したのは、これらの地域が地理的に隔離されていたことが最も重要な要素だったことは疑う余地がない。閉じられたことが、その時主流となっている事象と、その亜種や改良版ではない、まったく違った形の生き物や文化を生む母体となっているのだ。閉じられたことには、^Dそういう力があるのではないかと思う。

何の形も境界もない混沌の中から、何かが形を作っていく時。そしてそれが醸熟し、萌芽していく時。そこでは、わずかな風が外から吹き込むのも嫌がるような、外界とのつながりが一旦遮断された、濃密で、閉鎖的な時空間が必要とされることがあるのかも知れない。そういえば子宮もある意味、閉じられた空間だ。そのイメージの延長線上にある。

こういった考え方は、本当に新しいものが求められる芸術の世界では古くから大切にされてきた。秘められた感情、抑圧された情熱、そういった簡単には人に話せない、心の奥に封じ込まれた物語が洗練され、閉じられた空間から一気に目の当たる場所に解放される時、多くの人を感動させる力を持った芸術になる。閉じられたことが生む、ある種の偏り、純度の高さ、内圧のようなエネルギーの蓄積。描いては消し、消しては描く、その無駄で贅沢な作業。そして「小さな世界」の ^{*1}genesis。

閉じられたことは、育てること、に通じている。他と混じってしまえば、蹴散らされてしまうようなもの、色が消えてしまうようなものが、閉じられた空間だからこそ成長でき、成熟し、ある種の「世界」を作りあげることが可能となるのだ。^E

グローバルゼーションだ、グローバルスタンダードだと言うが、あらゆるものを混ぜて競わせれば、その結果、生き残るのは競争力や戦闘力という「偏った特徴」が強いものばかりになる。競争で選抜されるのは、実は限られた観点から見た優位性である。戦争に強い民族が、常に病気に強い訳でも、絵が上手い訳でも、足が速い訳でも、他人への思いやりに溢れている訳でもない。一つの観点で強い選択圧をかけてしまえば、その陰で多様で独自の特色を持った多くの形質が失われてしまいかねない。^F

(c) 経済で言えば、「消費者により良いものをより安く届ける」ことが天上天下唯一無二の正義のように言われているが、より安くを追求すれば、最も優れた企業とは、人件費がゼロ、つまり奴隷を使う企業である。社員を、あるいは国民を、どこまで

奴隷に近づけることができるか、そんな競争をしてはいないだろうか？

^{*2}

非関税障壁はなくすべきだ、みんなが同じように競争し、

容易に理解し合えるようにすべきだと言え、世界中の言語は英語だけでいい。^G 独自の文化は基本的にすべて非関税障壁である。ほんのちよつとばかり安いものを手に入れるために自分たちの文化を捨てるべきかどうか、少し頭を冷やして考えれば、すぐに分かることではないか？

人類は、ある意味、世界の各地にある小さな閉じられた空間の中で、多くの独自の文化や社会の豊かさを育んできた。かつては世界のあちらこちらに、閉じられた袋があり、それを開けるたびに独自の文化や物語が見つかり、そこに新鮮な驚きがあったのだ。それらは長い時間をかけて、その場所で、醸成されてきたからこそ独自のものだった。世界が開かれ、世界中の子どもがデイズニーしか見なくなつたとして、そこに本当に新しい物語を作る力が、果たして残っているのだろうか？

そして今、大学もそういったグローバル化の中にある。今の大学は、閉じられた時空間⁶ などという贅沢なものと本当に無縁の世界になっている。何かが育つのを待つようなゆつくりとした時間や空間はない。たくさん情報が流れ込み、それに対する多くの出力がすぐに要求される。目の前にあることをとりあえず「こなす」ことで、時間が過ぎていく。一つ一つの事項を取れば、文句を言う筋合いはない「必要で大切な」案件が並ぶ。しかし、これが全体として見れば、まったく不毛で H なことに限りなく近づいているのは、一体どうしてなのだろうか？

昼と夜が交互に来るように、洪水のように流れてくる情報を、もう一度静かな、小さな空間の中で動きを止め、遅々としていても密度のあるものに練り直す⁷、そういう作業が可能だろうか？ そのために私たちは何をすべきなのだろうか？

カビの胞子が発芽する。菌糸が伸びて、ビロードの絨毯のように幾重にも重なった、びっしりとした菌糸のマットが少しびつな円形^{*3}のコロニーを作る。先端の白い菌糸から内側の灰色の菌糸へ移相するグラデーシオンとその僅かな菌糸の濃淡が規則的な幾何学模様を作り、その上に白い気中菌糸が立体的で規則性の捉えがたい複雑な形を描いていく。わずか直径9センチメートルのシャーレの小さな閉じられた空間で、カビが「世界」を作っている。シャーレのフタを開けた時、吹き出すような香りがする。^I「カビが生える学問」の薫りだ。

(中屋敷均『科学と非化学 その正体を探る』による)

*1 genesis……ものの起源。始まり。

*2 非関税障壁……貿易における関税以外の障壁や制約。

*3 コロニー……細菌などを培養したときの、肉眼で見える集まり。

問一 二重傍線部①～⑧の漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 空欄部（ a ）～（ c ）に入る最も適切な語句をつぎの中から選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度以上使用しないこと）。

ア あるいは イ しかし ウ すると エ だから オ つまり

問三 傍線部A「白衣を着た学者」の文法的な説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 使われている品詞の種類は、名詞、助詞、動詞の三つである。

イ 使われている品詞の種類は、名詞、助詞、動詞、助動詞の四つである。

ウ 使われている品詞の種類は、形容詞、名詞、助詞、動詞、助動詞の五つである。

エ 使われている品詞の種類は、連体詞、名詞、助詞、動詞、助動詞の五つである。

問四 傍線部B「閉じられたこと」の「こと」を具体的に言い替えている漢字三字の語句を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 傍線部C「垣根を取り払い、開かれたことで、相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく」について、つぎの(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく」ということの説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 相対的に弱い文化の受容者が減少し、その文化圏において文化の継承が衰微すること。

イ 相対的に弱い文化の受容者が増加し、その文化圏において人々の連携が衰微すること。

ウ 相対的に弱い文化の受容者が若年化し、その文化圏において人々の交流が変化すること。

エ 相対的に弱い文化の受容者が高齢化し、その文化圏において物資の流通が変化すること。

(2) 筆者が傍線部Cのように見なす根拠の示されている三十字以内の一文をこれより前の本文中から抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい(ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること)。

問六 傍線部D「そういう力」を次のように説明した場合、空欄部 ア(五字) イ(九字) に入る指定の字数の語句をこれより前の本文中から抜き出して答えなさい。

▽「そういう力」とは、アを引き起こす力であり、それまでとは異なるイ力である。

問七 傍線部E「ある種の「世界」を作りあげることが可能となる」状況によって引き起こされる事柄として適切なものには○、不適切なものには×で答えなさい。

ア 秘められた感情や抑圧された情熱が洗練されること。

イ 優位性のためにあらゆるものを混ぜて競わせること。

ウ 企業が唯一無二の正義を主張して社員を酷使すること。

エ 世界中の子どもがディズニー映画しか見なくなること。

問八 傍線部F「その陰で多様で独自の特色を持った多くの形質が失われてしまいかねない」とあるが、筆者がこのように考える根拠として示されている過去の海外の事例を述べた部分を三十六字で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい（ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること）。

問九 傍線部G「世界中の言語は英語だけでいい」とあるが、筆者は、これが現実となった場合、他言語はどのようなものになる可能性があるかと述べているか。解答欄に合う形でその部分を二十字で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい（ただし、句読点・符号がある場合は一字に数えること）。

問十 空欄部

H

 に入る最も適切な四字熟語をつぎの中から選び、記号で答えなさい。

ア 完全無欠

イ 清廉潔白

ウ 本末転倒

エ 勇猛果敢

問十一 傍線部Ⅰ「カビが生える学問」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「カビの生えたような学問」の換言として、〃閉じられたこと〃の凡庸性を暗示している。
- イ 〃閉じられたこと〃の中で起きる活性を示して、学問の国際化への同調を暗示している。
- ウ 古き良き時代のサイエンスへの反省として、〃閉じられたこと〃の可視化を暗示している。
- エ 〃閉じられたこと〃の可能性を示して、グローバルゼーションへの警鐘を暗示している。

問十二 本文の内容に合うものをつぎの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は、現代社会の〃開かれたこと〃については、〃閉じられたこと〃の持つエネルギーや密度に対して無頓着となる原因であると見なして終始批判的な言及をしている。
- イ 筆者は、着物文化も日本語もローカルな文化となってしまったと嘆き、着物を着たいとは思わないと虚勢をはりつつ文化的アイデンティティーや愛国心を懐古している。
- ウ 筆者は、芸術の世界では古来〃閉じられたこと〃への尊重があると理解しており、閉じられたことが有する生む力や育てる力が芸術の世界を作り上げていると認識している。
- エ 筆者は、人類が世界のあちらこちらにある小さな空間で多くの独自の文化や社会の豊かさを育んできたことを知っているので、今の大学のグローバル化にも賛同している。
- オ 筆者は、今の大学が情報の面で外界とのつながりを一旦遮断することが可能であるのかどうかを考えつつ、研究者である自分たちが何をするべきであるのかを模索している。

問十三 この文章の表現の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文末を常体で記す文章で、若干の口語的な表現も交えて馴染み易さを添えている。
- イ 文末を常体で記す文章で、卑俗的な表現も多用して馴染み易さを添えている。
- ウ 文末を敬体で記す文章で、若干の漢文的な表現も交えて学術性を高めている。
- エ 文末を敬体で記す文章で、翻訳的な表現も多用して学術性を高めている。

問十四 『^か徴』の作者徳田秋声や『蒲団』の作者田山花袋などとともに自然主義文学の担い手として活躍した作者をア～エの中から

選び、記号で答えなさい。また、その作者の作品をカ～ケから選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|-----|---|------|---|-------|---|-------|---|------|
| 作者… | ア | 島崎藤村 | イ | 谷崎潤一郎 | ウ | 夏目漱石 | エ | 樋口一葉 |
| 作品… | カ | それから | キ | 春琴抄 | ク | たけくらべ | ケ | 破戒 |

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。

この部分につきましては、著作権の関係上、公開できません。